

たすき活動報告書

文責 高田夏輝 毛利千晶

活動期間 2017年8/3～7

活動メンバー 高田夏輝 毛利千晶 Sin Rom Pho Do

活動を終えて

・Daun sdang (ドンスダン) 小学校への支援 8/5

支援内容 1人あたりの物資数

学年	生徒数 (人)	鉛筆 (本)	赤ペン (本)	青ペン (本)	ノート (冊)
1年生	40	1	1	1	120p×2
2年生	44	1	1	1	120p×2
3年生	40	1	1	1	160p×3
4年生	35	1	1	2	200p×4
5年生	42	1	1	2	200p×4
6年生	26	1	1	2	200p×4
合計	227	227	227	330	120p×168 160p×120 200p×412

その他：ボール2個

サイ 3個

村の子どもの80%が学校に通うことができ、残りの20%は家の手伝い等の理由で通うことができていない状況が続いている。

支援物資については、毎度、上記の支援内容で文房具の支援を行ってはいるが、文房具が足りていないとのことだった。今後、様子を見ながら、少しずつ支援内容の変更を図りたい。

子どもたちの学習状況においては、英語等の他言語を学ぶ余裕はなく、クメール語の学習で精一杯だそう。また、英語を教えることのできる先生もいない。クメール語の他には計算の学習を行っているそう。先生が一人足りていないという問題もある。

校舎や校庭の様子としては、校庭にある遊具の劣化が特に目立った。滑り台の滑降面が破損していたり、ブランコの鎖が吊り金具から剥離していたりした。ブランコにおいてはロープと板を購入すれば修理の見込みがある。

・Watlork (ワットローク) 小学校への支援 8/6

支援内容

1人あたりの物資数

学年	生徒数 (人)	鉛筆 (本)	赤ペン (本)	青ペン (本)	ノート (冊)
1年生	40	1	1	1	120p×2
2年生	40	1	1	1	120p×2
3年生	27	1	1	1	160p×3
4年生	24	1	1	2	200p×4
5年生	22	1	1	2	200p×4
6年生	30	1	1	2	200p×4
合計	183	183	183	259	120p×160 160p×81 200p×304

その他：ボール 2 個

サイ 2 個

現在、プレイベン州にある5つの村から子どもたちが本学校に通っている。しかし、そのうちの1つの村は、貧困のためプノンペンへ出稼ぎに行く子どもが多く、学校に通えない状況が続いている。学校に通うことができている子どもの中でも、特に6年生は家族を支えるため、家の仕事を手伝いはじめる。生活がとても苦しいので、中学校進学は大変困難である。女性においては、小学校卒業後、約90%が家業をしたり工業の仕事に就いたりするそうだ。仮に進学できたとしても、生活の苦しさは和らぐことなく、1ヶ月程でやめてしまうケースもある。

本学校の子どもの中学校への進学率は40%だそうだ。残りの子どもは家業をしたり、建築や工業の仕事に就いたりする。進学する子どものなかには、プレイベン州で最も有名な日本—カンボジア友好学園へ進学できる子どももいる。本校の進学率は高く、毎年、5~10名が友好学園に進学する。今年も10名の合格者がいたそうだ。しかし、生活の苦しさから合格しても学校をやめてしまうという現状がある。

支援物資については、6年生がノート2冊足りていないという現状があるそうだ。半年で6冊ほど使うそうだ。また他に必要な文房具をお聞きしたところ、5,6年生で定規を必要としているそうだ。全員に1人1個の定規を支援することは難しいが、学校にみんなで使える保存用の定規を30個程、寄付することは可能であると考えている。次回の渡航時に考慮してほしい。

子どもの学習状況においては、現在、本校では4科目(クメール語、算数、地理、政治)の学習が行われているそうだ。小学校卒業時にはほとんどの子どもが読み書き出来るようになる。6クラス、6名の先生で運営しており、校長先生も子どもたちに教えている。先生の人数は足りているそうだが、給与は低い。

校舎の様子としては、大変劣化が進んでおり、授業中に校舎の屋根が落下したこともあるそうだ。本校の校舎は1990年に建立され、2002年に再建している。現在、新しい校舎を建てたいとのことだった。たすきにも少しでも構わないから費用を支援してほしいとのことである。支援を可能とするため、今後、日本での活動の改善も考えていきたい。



Daun sdang 小学校



Watlorc 小学校



・CHA 訪問 8/4

CHA (Cambodian Handicraft Association) は、地雷被害者やポリオによる女性の障害者が裁縫技術を得るために設立された。現在では、難聴や知的障害を持つ女性の受け入れも開始している。首都プノンペンにあるセンターでは、以前と変わりなく 20 名で共同生活を送り、一日に 8 時間 (8:00~11:30 13:30~17:30) のスキルトレーニングが行われている。スキルトレーニング以外にも料理、洗濯、掃除などの家事、クメール語、英語を学ぶことができ、自立した際に必要な「生きる力」を養うプログラムがなされている。また、以前はシェムリアップにも店を構えていたが現在は閉鎖している。

客員状況としては、雨の日が少ない 10 月~12 月は比較的外国人客が多いという。逆に雨の多い 6 月~8 月は客が少なく、そのほとんどがカンボジア人客だそうだ。

CHA で働いている女性たちはとても元気に活動していらっしやった。私たちとも心安くコミュニケーションをとってくださった。熱心な活動のもと、アイマスクやブローチ、ひもを編んでつくったネックレスなど新商品も販売されていた。

販売状況においては、CHA 店内ではもちろんのこと、日本人スタッフの方が日本にて販売していたり、プノンペン市内にあるイオンモールにて販売されていたりしている。特に鞆やネックレスは日本人客に人気があり、よく購入されているようだ。

・CCASVA 訪問 8/7

スラムの子供達の収容施設が閉鎖されたと聞いていたので、事務所を訪問した。

施設が閉鎖となった理由としては、資金不足がある。政府の方針が変わり、NGO への資金提供のルールが厳しくなったために施設を運営できなくなったそうだ。収容されていた子供たちは、漸次、他の NGO 施設に移ったり、親の元へ戻っていった。

CCASVA の現在の活動は、シェムリアップ州、コンポンチャン州での子供の人権保護活動である。両州合わせて 24 人ソーシャルワーカーが 350 人の子供の管理をしている。政府・行政・警察と連携しながら、ドラッグ・児童売春・家庭内暴力の監視を行う。

これまでたすきの活動では、CCASVA の施設にノートやペンを支援してきた。しかしながら、子供の施設がなくなった今、CCASVA としては資金援助か NGO 職員を必要としている。そこで、今回は文房具の支援は見送り、今後の CCASVA の活動状況を見守り支援再開を考えることとした。



・感想

文責 高田夏輝

今回で3回目の渡航となりました。これまで2016年2月、2016年8月と渡航してきてプノンペンや農村、小学校の変化を少しずつ感じてきました。

渡航をするたびに継続的に小さな支援を続けていくことの大切さを実感する一方で、校舎建設や奨学金など大きな支援の必要性も感じます。中学校になると家族を助けるために学校を辞めざるを得ない生徒の存在を聞くと文房具だけの支援だけでは足りません。校舎も雨漏りがしており、壁の剥離落下の危険性もあって修理・再建が必要です。たすきの活動は大学生が継続して支援できることをポリシーとしているので、これらの状況にどのように対処していくべきか悩むところでもあります。

しかしながら、たすきの活動は単なる文房具支援には止まりません。例えば、今回の渡航では自由に絵を描いてもらいました。好きな色を使って自由にお絵描きする体験は、学校の授業ではできません。また、僕らと一緒に活動してくれているカンボジア人メンバーも、小学生のロールモデルになれると思います。勉強をすればどんな将来があるのか、カンボジア人メンバーから話をしてもらうことでリアリティのある将来像が見えてくるかもしれません。カンボジアの小学生にそうした体験を提供することも僕たちの活動の目的の一つです。

これからもカンボジアの小学生に必要なことを考え提供し、彼らの未来に少しでも寄与していきたいです。

文責 毛利千晶

今回で2回目の渡航となりました。2015年2月に初めて渡航してから約2年半の間、日本での募金活動や、京都大学の学園祭にてCHAの物品販売などの活動に取り組んできました。今回の渡航でまず感じたのは2年半のうちにカンボジアの風景ががらりと変わっていたことです。高層ビルやショッピングモールなどの建物が増え、新しく橋が造られていたり、整備された道路が増えたりと急激な経済発展を肌で感じる事が出来ました。その背景には、カンボジアがメコン川流域の中心部に位置することもあり、タイやベトナムとの物流網が整備されるなど国際化が進んでいるということが挙げられます。しかし、一方で市外の農村では、小学生という幼い子どもたちが家族を支えるために学校を辞めて家の仕事を手伝ったり、仕事についたりして生計を立てることが当然のようにされ、貧困が絶えない状況が続いています。

そのような状況下で私たちにできることは、支援物資の提供で勉学のできる環境に寄与することはもちろんのこと、子どもたちの将来に役立つ力を身につけるような体験を提供することも挙げられます。今回の渡航では、自由に絵を描くプロジェクトを行いました。カンボジアには美術教育がありません。真っ白な紙に色を使って自由に描く体験は子どもたちにとって新鮮なだけでなく、表現力を向上する経験になったと思います。私は大学にて美術科を専攻しています。本プロジェクトでは自由に絵を描いて終わってしまうのではなく、子どもたちに他者の描いた絵を鑑賞するような声かけをしました。また、今後、日本でも子どもたちに自由に絵を描くプロジェクトを実施します。その際カンボジアの子どもたちが描いた絵を紹介し、活動を通して、日本の子どもたちに国際間の文化の違いについて感じてもらいたいと考えています。

このように、東京オリンピック・パラリンピックを控え国際化が進む日本で、少しでも多くの人にその違いを知ってもらったり、感じてもらうことで国際間の理解が深まると考えます。これからもカンボジアでの活動のみで満足せず、日本でできることを考えて実践していきます。



・会計報告

2017年度 夏渡航 (2017年8月3日～2017年8月8日)

報告 毛利千晶

① 小学校への配布、支援

Daun sdang (ドンスダン) 小学校、Watlork (ワットローク) 小学校の集計

学年	生徒数 (人)	鉛筆 (本)	赤ペン (本)	青ペン (本)	ノート (冊)
1年生	80	80	80	80	120p×160
2年生	84	84	84	84	120p×168
3年生	67	67	67	67	160p×201
4年生	59	59	59	118	200p×236
5年生	64	64	64	128	200p×256
6年生	56	56	56	112	200p×224
合計		410	410	589	120p×328 160p×201 200p×716

その他

支援物資	数量
ボール (個)	4
サイ (個)	6

② 自由に絵を描くプロジェクトに使用した物資

使用物資	数量
A4 コピー紙 (500枚入り)	1
色鉛筆 (12色セット)	5
鉛筆削り	3

③ タヤマビジネスハイスクールへの支援

支援物資	数量
鉛筆 (本)	20
赤ペン (本)	20
青ペン (本)	21
ノート 120p (冊)	12
ノート 160p (冊)	9
ノート 200p (冊)	14

④ 支援物資の会計

品目	単価 (リエル)	数量	金額 (リエル)	金額 (\$)
鉛筆	150	430	64500	16.125
赤ペン	200	430	86000	21.5
青ペン	200	610	122000	30.5
120p ノート	600	340	204000	51
160p ノート	800	210	168000	42
200p ノート	1000	730	730000	182.5
ボール	3500	4	14000	3.5
サイ	2000	5	10000	2.5
A4 コピー紙	12000	1	12000	3
色鉛筆	1000	5	5000	1.25
鉛筆削り	500	3	1500	0.375
		合計	1417000	354.25
		まとめ買い割引	-32000	-8
		割引後合計	1385000	346.25
		端数処理後		346 \$

リエル/\$ レート

4000 リエル/\$